

「聖公会が好き！」

牧師 司祭 ステパノ 卓 志雄

英国の宗教改革で誕生した英国教会の海外への宣教は東北アジアまで至り、東北アジアの漢字圏文化の国では、伝統的な信仰告白である使徒信経とニケヤ信経にある「聖なる公同の教会(Holy Catholic Church)」から「聖公会」と名付けられました。英国教会 — 聖公会 — を誕生させた英国の宗教改革の原因は、勿論信仰的な部分にもあったのですが、それと共に政治的な部分にもあったと言えます。それは王政を中心とした英国国民の愛国心 — ローマ・カトリックを中心にした大陸勢力に対して — の発露だと言えるからです。

このように一国家のナショナリズムは宗教改革という過程を通じて強力な国家建設の道を歩みました。このような状況の中で誕生した聖公会はローマ・カトリックとプロテスタントの諸要素を包容し、かつ一方にかたよらない「Via Media」の精神でその独自性を保持してきました。大韓聖公会のチュ・ナクヒョン司祭は聖公会を「改革したカトリック教会」「教理に寛大な正教会」「カトリック伝統を維持しているプロテスタント」であると語りました。わたしは「Via Media」の精神の中で全てを受け入れて歩んでいる「我が聖公会」が大好きです。

「Via Media」を直訳すると「中庸」という言葉になり、AとBの間でバランスを保つ、というような意味ですが、「中道」という訳もあるため真理を求めて「道」のただ中を歩み続けることをも意味していると言われていています。立教大学の西原廉太司祭は英国教会の「Via Media」は学問的、教理的中庸であるだけでなく、改革され続ける旅の途中にある教会を意味すると強調しています。（西原廉太、『リチャード・フッカー—その神学と現代的意味—』、聖公会出版、1995、71頁。）おそらく「Via Media」は真ん中の道を意味しているのではなく、両極端を全て受け入れ包容しながら新たなる道を模索していくことを意味しているのではないかと思います。

英国における宗教改革時代の葛藤と妥協、分裂と一致の経験と試行錯誤の歴史の中で自らの道を校正した結果が今の聖公会の道です。「わたしだけが真理を知っているので、わたしだけが正しい。」「あなたは真理をもっていない。あなたは間違っている。」という立場ではありません。英国の宗教改革の経験を通して「わたしは間違っているかもしれない。」「あなたが正しいかもしれない。」「しかし真理はわたしの所有物ではない。」「絶対的真理の持ち主である神が示してくださった道を共に歩もう。」という人間の不完全さをもっている群れだと聖公会は自らを定義しています

むしろ「不完全さ」を教会の誇りとしています。この態度から聖公会は世界の不完全な人々を受け入れ、共に真理の道を歩んでいます。不完全で罪深い人間が集まって互いの信仰と経験と考えを語

り合いながら、わたしたちの歩みを導いてくださるように神に礼拝を捧げて神の国に向かって共に歩んでいます。

近年東京教区は1教会1牧師を維持できない状況になりました。そして東京教区における組織の再構築と教会の再編も視野に入れて検討されており、近隣の教会の仲間とどのように連帯していくかが問われています。このような状況の中でわたしたちは様々なことを考え、述べています。このような時、忘れてはいけないことがあります。「Via Media」の精神です。「わたしの考え、経験、判断だけが絶対正しい。」「あなたの考え、経験、判断」は間違っている。」という「絶対的自己肯定・他者否定」の歩みをもって一人で旅するよりは、自分の不完全さを認めながら、「違い(different、比較したときの差)」を「間違い(wrong、誤り)」として認識するのではなく、「わたしも、あなたも正しい。しかしわたしもあなたも間違っている。」と考えながら神が示しておられる真理を探るために、神から与えられた道を共に歩む旅をしましょう。

今のわたしたちに対してパウロは語っています。『**兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。(コリントの信徒への手紙 I 1:10)**』 完

練馬聖ガブリエル教会 教会報「しゅろの葉」(第168号 2015年7月12日発行)より